



(ベルン大学)

(ノイロセンター)

欧州BSE研究調査（遺伝子工学科 尾上貞雄）

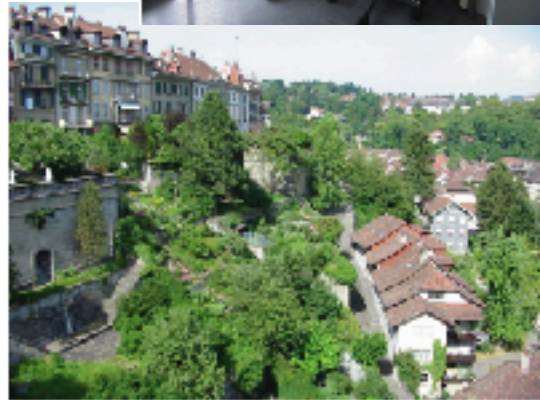
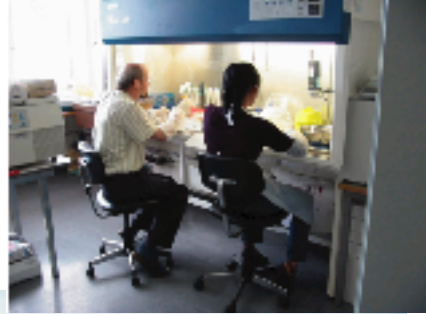
BSE研究調査のため、平成14年6月17日から21日の5日間、スイス、フランスおよびデンマークを訪問した。

スイスでは、ベルン大学臨床獣医学部のアンドレアス ツルブリッゲン教授を訪ね、ノイロセンター(神経学研究所)の施設、実験室を見学して、スイスのBSE研究およびサーベイランスについて聞いた。

BSEの検査材料を採取する解剖室は、管理区域になっており、厳重なプリオン対策をとっていた。また、P3実験室は、厳格に運営されており、安全キャビネット内でのプリオン検査、プリオンの病理組織標本を見ることができた。

この他に、フランスのクレモンフェランの畜産試験場、デンマークのホーセンスの農業指導センターおよびオーフスの食糧農業漁業省地方獣医官事務所を訪ねた。

英国からの家畜および肉骨粉の輸入によるBSEの発生、国内での拡大、その後の対策などについての話を聞くことができた。BSEはヨーロッパの経済圏のなかでひろがった重大な家畜疾病であるが、しかし、デンマークでは牛肉の消費は減っておらず、2001年は増えたとの話もあった。



(ベルン旧市街)

畜産試験場公開デーの開催



9月19日木曜日「見る・聞く・ふれる新しい畜産の世界」というキャッチフレーズで畜産試験場公開デーを開催した。当日は好天に恵まれ、計画どおりに実施された。来場者数は約400人、牛肉・豚肉の試食会参加者は約250人であった。来場者の住所は十勝支庁管内が多かった。

「十勝の乳製品を考える」というテーマで行ったミニシンポジウムは、共働学舎新得農場代表宮嶋望氏からは「共働学舎の自然環境を生かしたチーズ作り」、当場の研究員グループからは「十勝の乳製品を食べて・見る」と話題提供があった。どちらの話題も来場者の関心が高く、講堂に準備した席が不足し、立って聴講する人がみられた。

また、場内見学バスは延べ6便運行され、場内施設の見学と増田山からの展望に有意義な時間を過ごした。

来場者の感想としては、農家にとって暇な時期で、子供を連れてくることのできる休日が良いというものがあった。

